わこのみ
猫蓑通信
第67号
平成19年(2007)
4月２４日発行
（年4回発行）

式目の効用

青木秀樹

原っぱでボールを蹴っている少年に「何をしてるの」と聞けば「サッカー」という答えが返ってくるだろう。空き地があってボールがあればボール遊びができる。世界的な名選手になったジダンもロナウジーニョもそうやってボール扱いのテクニックを身に着けた少年であった。ワールドカップやJリーグのサッカーの試合と原っぱでの少年のサッカーとは何が違うのか。「手を使わずにボールをゴールに入れる」という基本原則は同じであるが、試合をするからには一定の決め事が必要になる。競技場やゴールポストの広さ、試合時間、選手の人数、反則の規定などは最低必要な決め事であろう。

現在日本中に連句愛好グループが散在しており、それぞれ自分たちの連句を楽しんでいるようである。中には長句と短句を付け合うことだけを楽しんでいるグループや、自分たちで決めた自己流のルールにより運座をしているグループがある。彼らに「何をしてるの」と聞けば「連句」と答えが返ってくるだろう。そして連句は楽しいというだろう。

連句を現代の文芸として成立させるためには、一定の式目（ルール）が必要である。私たちがふだん「式目」といっているのは連句を連句たらしめる「大原則」と、こうすればよい作品ができるという「ノウハウ」からなっている。式目を単に禁止事項であると思っているのは誤解である。

まず連句の大原則は「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし」という芭蕉翁の示したことだけ、すべての事柄が輪廻にならぬように気をつけることである。観音開き、三句絡み、遠輪廻などは大原則に含まれる注意事項である。

次にノウハウとして示されているのが、句数・去嫌、一巻の構成、韻律である。これらは結社・グループで異なる部分である。

私たちには東明雅先生が残された「猫蓑会式目」がある。先生はその前文に「式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである。」とお書きになっている。「猫蓑会式目」は明雅先生が根津芦丈師から教えられた連句作法を基に、連歌時代の式目や芭蕉俳諧の研究、『貞享式海印録』（原田曲斎・一八五九年刊）等を参考に手を加え、猫蓑会の連衆との実作の場で試行を重ねられた後に整理されたものである。

式目はよい作品を作り上げるためのノウハウであるから、式目に障ることはしない方がよい。「芭蕉・蕪村ほどの才能の持ち主でなければまず式目に従っておくのが無難である」と明雅先生が折に触れておっしゃっていたが、式目を軽視したり自己流に解釈するようなことは好ましくない。

私は連句の愉しみのほとんどは「連句の座の愉しさ」にあり、さらにその席で巻いた一巻が「よい作品」になることで満足感が得られると思っている。連衆個々人の文芸上の感性が異なるのは当然であるが、同じルールの下で個性をぶつけ合い、かつ融合して作品ができあがる。個人のよいところを認め合ってゆくところに連句の面白さがある、座が楽しくなければ良い作品はできないとさえ思っている。他の流派の方との交流が盛んになっているが、式目を同じくする猫蓑会会員同士の座には安心感がある。式目には一座の連句興行を円滑にすすめ、かつ愉しい座にする効用がある。

最後に、作品を記録に残すからには、キズは少ない方がよい。どんなに気を配っていても、気づかなかった間違いがしばしばある。巻き上げた作品を反故などと思わず、しっかり校合して仕上げてほしい。

猫蓑会式目の整理

東　明雅

従来、猫蓑会には式目は存在したが、それを整理した式目表とでも言うべきものはなかった。唯一、「二十韻季題配置表」のカードの裏にある「句数式付去嫌」・「式目歌」はその代用であったが、近頃、その不備を痛感するようになった。

たとえば、「式目歌」の第一首「衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし」などは、古い連歌の時代からの伝統を残したものであるが、現代人には意味も理由も分からぬだろう。

それで、現在猫蓑会で使っている式目類を整理して一覧表にしたが、左の通りとなった。

式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである。大方のご参考になれば幸いである。

猫蓑会式目

一　心得

式目は翁の「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし」を旨とし、すべての事象が輪廻にならぬよう注意する。

二　句数

1　句数は春秋三句より五句（普通三句）夏冬一句より三句（普通二句）とし、季戻りを嫌う。

2　恋句は二句より五句続く。一句で捨てない。

三　去嫌

1　同季春秋は五句去り、夏冬は二句去り。その他、月・夢・涙など特に印象の強い文字は五句去り。

2　同字・神祇・釈教・恋・無情・述懐・懐旧・妖怪・病体・時分・夜分は三句去り、その他の題材は二句去りであるが、なるべく同じような題材は離して用いるようにする。

3　人情自、人情他、人情自他半、人情無（場）の各打越および縞を嫌う。

4　片仮名・アルファベット・数字の打越を嫌う。

四　一巻の構成

1　発句は当季とし、切字を入れる。

2　脇句は発句と同季、同時刻、同場所とし、体言止めが普通。

3　第三は「て、に、にて、らん、もなし」止めが普通。

4　発句使用字（月、花を除く）、及び恋の字は一巻再出を嫌う。

5　発句以外に切字「や、かな」を嫌う。

6　表に神祇、釈教、恋、無情、述懐、懐旧、妖怪、病体、人名、地名を嫌う。但し発句はこの限りではない。

7　月の定座はオ五、ウ七、ナオ十一（二十韻ではウ一、ナオ五）とし、場合によって引き上げることもこぼすことも自由であるが素秋を嫌う。

8　花の定座はウラ十一、ナウ五、（二十韻ではナウ三）とし、引き上げることはあってもこぼさない。

9　恋は一巻に必ず出す。ウラおよびナオにそれぞれ一回出すのが普通である。二十韻ではどちらか一回でもよい。

10　かな止めまたは漢字止めの五連続を嫌う。

11　挙句は発句に返らぬよう特に注意する。

五　韻律

短句下七の四三および二五を嫌う。

六　仮名遣

歴史的仮名遣・現代仮名遣どちらでもよいが、その混用を嫌う。

ねこみの第二十一号
ねこみの第四十九号より転載

平成十九年一月二十一日
於ホテルフロラシオン青山

「初大師」

上月淳子　捌

名物の飴切る音や初大師　淳子
屠蘇に酔ひたる若人の群　節子
マイブログキー打つ指の軽やかに　美奈子
壁の版画をカラフルに替へ　美保
ウ 夏富士に明るい月のぽっかりと　豊美
甚平姿集ふ縁台　實
命まで賭けたと噂かしましき　奈
蓋をあければ姉と弟　節
偽・欺・疑の字やたらに目立つ週刊誌　保
棚から納豆全部消えたる　奈
悠然と格差社会の隅に生き　節
京の町並スケッチをして　豊
浮見堂比叡よりの風花の舞　實
また越えゆかな蝶と旅人　奈
ナオ 若駒のギャロップ騎手の身も軽く　豊
天使がびしり鞭の一振り　保
歌声は無傷の空へ吸ひ込まれ　節
もろ手を広げ仰ぐ裸木　奈
節分の鬼となりたる父の顔　豊
娘のハート時に鍵あり　奈
強引な口説上手に引きずられ　淳
昔の恋を偲ぶ邯鄲　豊
海底に珊瑚生れつぐ月の夜半　保
硫黄島には残る数珠玉　奈
ナウ ふるさとの話も時にデイホーム　實
デルデスデムとドイツ語も出る　同
花盛りすこしほつれし緋毛氈　淳
笑ひの洩れる春宵の宿　執筆

連衆　長坂節子　鈴木美奈子　高瀬美保
高橋豊美　梅田　實

「初鏡」

倉本路子　捌

よろしくと皺へひと声初鏡　路子
振出しとなる雙六の賽　洋子
海岸線カメラ自慢の人群れて　郁子
曲げわっぱ買ふ土産物店　アンズ
ウ 終列車訛なつかし夏の霜　政志
力をこめて絞る夜濯　俊子
情厚きイタリア女の胸の谷　洋
閨のまにまにねだるブランド　俊
いつしかに格差社会の隅にをり　志
撃つまねすれば犬が転がる　ア
晴天に聳ゆる真赤な大鳥居　郁
昨日のごとき応仁の乱　洋
花衣帯にさしたる舞扇　ア
連立つ人の踏める若草　郁
ナオ 鳥貝の握りを頼むエトランゼ　俊
ちびちび舐めるシャトーメドック　ア
お宝もがらくたもある地下倉庫　洋
たまにはぬらりひょんも出るとか　郁
おお寒と首をすくめる雪催ひ　ア
愛のシュートを君のハートへ　路
せまられてのっぴきならぬ四畳半　洋
※へぼ追ふ男野越え山越え　俊
珍しき雁の渡りを見る月夜　郁
腰の強さの名代新蕎麦　洋
ナウ 白秋の詩は今でも夢を生み　志
幼子とばす紙の飛行機　俊
船頭の纜つなぐ花大樹　路
魚板うららに響く夕暮　志

※へぼ追ひ＝地蜂に真綿をつけ、その地蜂を巣まで追いかけ、蜂の子を取ること（信州方言）

連衆　大島洋子　東　郁子　松島アンズ
峯田政志　三木俊子

「艶めいて」

青木秀樹　捌

艶めいて衿元直す初鏡　秀樹
年男には若すぎる妻　美代子
貨客船異国のことば交されて　美恵
強いスパイス香る厨房　千惠子
ウ
石畳ひとり歩めば夏の月　朋子
赤い金魚の絵てがみを出す　初子
若きらはゲーム機求め長き列　代
揚げ足取りのディベートをする　千
闘牛の今口はゆっくり反芻し　恵
地震の被害は徐々に回復　初
大根を泥つきのまま出荷して　千
旅から旅へ役者人生　朋
あたたかにガラスを伝ふ花の雨　初
朝寝の床に届く新聞　朋
ナオ
春の風邪移さんとしてひしと添ひ　恵
ドライアイだし不感症だし　千
ドンジュアンのリストの端にある名誉　恵
落飾せよと天命を受く　樹
伯父と甥遺伝子ともにするならん　朋
千変万化雪の結晶　千
研究費たりないと言ふ教授会　恵
夢の中ではアトム操る　代
キリマンジャロ氷河の月はギザギザと　千
芦刈急ぐ水の辺の民　初
ナウ
万妖祭準備に小さき鬼もゐて　千
ジャンケンポンで席の取り合ひ　代
花吹雪酒は呑むべし浴びるほど　樹
時々羽音させる蜜蜂　執筆

連衆　山田美代子　山口美恵　鈴木千惠子
高塚朋子　田中初子

「小町の札」

梅田利子　捌

譲られぬ小町の札や歌留多取り　利子
笑顔ばかりの女正月　常義
パスポート出国の人溢れゐて　恭子
いつとはなしに外暗くなる　麻子
ウ
一夜酒蛾眉の形を見定めず　ジョウ
烏賊釣をする幅広の肩　恭
言はずとも判って欲しい恋もあり　麻
マドンナいとしずっと今でも　ジ
天金の社史を飾りし社長室　利
飛行船行く高層の窓　常
アメリカへ投手も野手も名乗り上げ　麻
瞑想のまま眠る麗日　恭
千年の花はらはらと神楽殿　常
春のショールを落しましたよ　同
ナオ
坂道を風に追はれて三輪車　ジ
利上げならずに進む円安　常
デパートに故郷(くに)の産物さがしつつ　恭
一茶の忌日雲仰ぐ路地　常
冬眠をしない熊など現れて　麻
独身寮で待ち明かす夜　ジ
こんな奴仏に見えて月の閨　恭
愛の流刑地蛇穴に入る　麻
強羅より乙女峠へ峪紅葉　ジ
お湯の加減を試すラーメン　恭
ナウ
定年後趣味のお店を立ち上げて　ジ
受験生には声を掛けずに　麻
枝垂るるも宙(そら)に盛るも花の精　利
リズム軽やか双蝶の舞　執筆

連衆　生田目常義　式田恭子　内田麻子
林　ジョウ

「讀初や」

長崎和代　捌

讀初や江戸切絵図の渋谷村　和代
爆竹鳴らす若者の群　藍
海騒の舷梯のぼる次々に　あや
デジタルウォッチ色はシルバー　かりん

ウ
雨蛙ゆるりと出でて宵の月　好敏
ひっつかないでと汗ばんで居る　藍
年下の男を常に惹きつけて　ん
昨日の酒のまださめぬまま　敏
仏壇に隠しておくか免許証　や
大統領はまたも窮地に　藍
曲馬団覚えの悪い馬二頭　や
合はせ鏡で直すソバージュ　敏
カモミール今も乙女の花の昼　藍
ふっと笑まふは紀の国の山　や
ナオ
闘鶏の羽の飛び散る烈しさよ　敏
テレビクルーはみんなジーンズ　や
正社員・派遣にパート・アルバイト　藍
頭痛外来暖冬も混み　ん
火の番は車で廻るご町内　敏
待ってゐました成田屋の見栄　藍

生き死にを賭けたる恋の崖っぷち　ん
禁断かしら綴る桃の実　や
忘れ得ぬ月のドチリナキリシタン　同
運動会に乳母も転んだ　ん
ナウ
わらわらと四次元空間裂けるらん　藍
床抜けるほどコイン収集　敏
花満ちて美し国原めぐる旅　代
聞香の客しっとりと春　ん

連衆　矢崎　藍　中林あや　登坂かりん
豊田好敏

「音の大吉」

佐々木有子　捌

拍手の音の大吉初御空　有子
亥の字書き上げ子らへ年玉　守男
カービング木屑だんだん溜りきて　久美子
そろそろお茶の運ばるる頃　守枝
ウ
源流は国境なり夏の月　央子
ペアのアロハで旅は道連れ　久
むらさきが好きあなたはもっともっと好き　央
余白に描く君の似顔絵　男

不可解な殺人事件うち続き　央
電子ロックの高層マンション　久
マイバッグ単身赴任のショッピング　枝
薬無縁の胸の筋肉　央
花の下流れるやうに太極拳　久
ボートレースに校旗はためく　男
ナオ
春火鉢しまふともなく部屋の隅　枝
物解りよきいまどきの姑　久
賞味期限が気になりながらお裾分け　男
スペースシャトルのクルー着ぶくれ　同
群がりて腹いっぱいの寒雀　久
魔性の匂ひ放つ後家さん　枝
修行僧禁断なれば狂ほしく　央
濁り酒酌み記す自叙伝　同
原潜の潜望鏡に月青し　男
深くかすかに蚯蚓鳴くなり　久
ナウ
都合よきことばだけ聞く老いの耳　央
早寝しやうかテレビ見やうか　枝
花凛と人なき山に二百年　有
若鮎上るふる里の川　枝

連衆　近藤守男　副島久美子　谷本守枝
遠藤央子

「能始」

染谷佳之子　捌

能始とろとゐねむりはじめかな　佳之子
ものの蔭よりかよふ梅が香　了斎
斑雪野にボーイスカウト輪になりて　達子
明日に迫る図書の返却　庸子
ウ
水槽の月に跳ねたる熱帯魚　昌子
灼けた素肌の覗くスリット　斎
焦らされてへこむ男のじれったさ　庸
十八畳に据ゑる甲冑　同
酔ふほどに世界平和を語りだす　斎
うす日を開ける太っちょの猫　達
スペードの女王はすぐに首を刎ね　斎
紙皿に取るあつあつのピザ　之
滝桜花の盛りに出遇ひたる　達
一村とよむ蛙合戦　昌
ナオ
お神輿の担ぎ手募集春祭　庸
ブランド野菜軒先に積む　斎
良い細菌悪い黴菌使ひ分け　同
哲学者めく梟の貌　庸
埋火を掻き立てをれば跫来　達
上司の妻と抱きあふ小屋　斎
節穴をぴたりと塞ぐ贋ピカソ　庸
ストレッチする生身魂たち　昌
新宿の母に月光やはらかく　庸
煙草のけむりさらふ秋風　達
ナウ
白色の鶏が茶色の卵産み　昌
大おむすびがころり転げる　斎
試走車で花のトンネルはしり抜け　之
手を振ってゐる耕の人　達

連衆　鈴木了斎　篠原達子　久保田庸子
中野昌子

「初景色」

川名将義　捌

山河のまだやはらかき初景色　将義
恵方詣に塀伝ふ猫　真呂
ロボットに給仕されゐる夢を見て　末悠
いつもどこでもメモをとる癖　泉子
ウ
月涼しつくばひにある別世界　利子
浴衣の君と二重唱する　悠
別れ際明かされたりな人妻と　呂
ダイヤのピアス耳に眩しき　義
腕の傷の赤さの気になりて　泉
一時停止は辻の信号　利
犯罪者国外へ逃げうやむやに　悠
其のかみ以来亀は鳴くもの　義
ドレミファソララで咲いた花大樹　泉
俊寛忌とてクッキーを焼く　悠
ナオ
春なれや抜けし朽歯を闇に打ち　呂
小児病棟絵画教室　悠
伝承の民話を語るDVD　利
ちょっとばっかり壁のすが漏り　泉
「勝ってくるぞ」と征きしままなる霜の道　呂
母の慈愛は背嚢の中　泉
寂しげなペコちゃん強く抱きしめて　義
おわら祭の列に紛れる　利
月待ちて末期の一打鉦叩　呂
※
爽籟となるルーレット族　悠
ナウ
ディプロマを取ってソムリエめざします　泉
次の万博うらら上海　利
花の夜をひとさし舞ひて世阿弥去る　義
百連凧にあがる歓声　執筆

※ルーレット族＝首都高の同じ所をルーレットのようにぐるぐる廻る暴走族

連衆　木村真呂　棚町末悠　青木泉子
武村利子

「注連縄の」

山本要子　捌

注連縄のあをあをとして夫婦楠　要子
ひと声高く宮の初鶏　良子
愛用の望遠鏡を磨くらむ　冬乃
毬栗頭興味津々　暁巳
ウ山小屋の枕は月に濡れてをり　啓子
そっと抱けば空蟬のやう　巳
ありさうもないと思ひつ待つメール　乃
柱時計もデジタルとなる　巳
髭しごき碁石並べる長寿眉　良
熊野古道の旅を計画　乃
これはまた烏天狗の現れて　良
右に左にボール蹴りあふ　啓
乗り合ひの赤い靴バス花巡り　良
港の見える丘の春風　巳
ナオのどらかに訓練受ける盲導犬　啓
ごみの分別念に念入れ　乃
乱数に素数関数黄金数　巳
テントを張って氷下魚釣る人　良
寒凪に選挙対策ひそひそと　乃
事務所と看板かける愛の巣　同
錆び釘で化膿したのが縁となり　巳
今年酒とて口うつしする　良
探索機「セレナ」を待つか月の舟　乃
こほろぎ相撲に興じゐる奴　啓
ナウおほどかな最後の皇帝溥儀いづこ　良
耕しいつも唇へ煙草で　乃
花の午後篠笛で吹くメヌエット　要
甘味少々利きし独活和　啓

連衆　本屋良子　百武冬乃　島村暁巳
小池啓子

「まづ金偏」

林　鐵男　捌

書初めやまづ金偏のつく字から　鐵男
今は出ていくだけの年玉　碧
麗らけくひと日が過ぎる縁側に　ふみ
またもこどもを産んだ野良猫　雅子
ウほんのりと朧の月は橋の上　蓉子
鴨川踊り連れだって行く　雅
傷つくをおそれ恋には臆病に　碧
ひたすら祈る僧房の窓　雅
何事が気根をかくもうねらせる　み
アンリ・ルソーの構図遠近　蓉
店消えてペコちゃんポコちゃん下を向く　碧
埋め立ての海のため息を聞き　蓉
花吹雪此処も訪ひしか「千の風」　同
誰が袖触るる鞦韆の揺れ　み
ナオ定むれば終の棲家に山笑ふ　雅
豚足料理囲む食卓　同
人集ひ太極拳の輪を広げ　み
手袋片方さがすバス停　碧
鰤起し別れ話を持ち出せば　雅
若い娘とまたも再婚　み
相性などみてもらっても何になる　碧
覗きからかふ軒の蓑虫　み
望月にトランペットを吹き上げん　同
ぶくぶくぶくと仕込むどぶろく　雅
ナウ濡れ煎の焼ける匂ひの銚子駅　蓉
半ば目を閉ぢ托鉢の僧　雅
己が身の運命を花にきかまほし　男
霾晦する故里の空　み

連衆　松本　碧　中村ふみ　武井雅子
五味蓉子

「拝承の」

西田一枝　捌

拝承の夢の数々屠蘇祝ふ　一枝
皆笑顔とは成れる初春　千町
出航のバンド演奏ととのひて　嫋
犬わんわんとコラボレーション　ゆみを
ウ 月涼し岩彩絵具さっと溶き　遊民
立居も楚々と羅の人　町
目礼のその少年の名も知らず　同
ざんばら髪はいつか丁髷　嫋
西東古き都は寺ばかり　町
隅にひっそり言水の墓　を
世を挙げて痩身食品持て囃し　民
無理しないこと楽しないこと　嫋
墨堤に小さき座布団花筵　を
お陰参りの寄り道の出湯　民
ナオ 亀鳴いて悪いやつらがぞろぞろと　嫋
軽い紙だが重い報酬　町
今もなほ紛争絶えぬ聖地なり　同
黒い帽子に止まる寒禽　嫋
ラグビーの前衛がつんとぶつかって　を
私の好きな彼は博識　民

Noと言ふその唇をふさがれる　町
銀杏落葉はやがて褥に　嫋
吉凶のいづれかとろり赤い月　町
冬支度する合掌の村　嫋
ナウ 故郷は山のあなたの空遠く　を
胸にあふるる恩情の幸　民
ひとひらの花散る窓辺源氏香　枝
お取り寄せする鯛の浜焼　嫋

連衆　原田千町　八代　嫋　青島ゆみを
内田遊民

「地軸」

横井士郎　捌

初旅や地軸を四方に巡りなむ　士郎
若潮洗ふ千万の島　文子
歌ひあぐるオペラにしばし聴きほれて　壽子
遠目にわかる仕立屋の腕　英子
ウ 汗みづく彫物の龍月にらむ　わこ
宵宮の闇にぐいと抱き寄せ　文
時経ちてやっと消えたるキスマーク　英
あとの詳細ホームページで　壽

熟しては発酵進む姥の知恵　わ
高価な万寿やたら呑みする　英
大臣の資質につける（クェスチョン）？　文
からすは偉い好み選別　壽
遅ればせの御衣黄の花山裾に　文
紙風船を追ひかける児ら　わ
ナオ 春雷に犬たしなめる散歩道　壽
勝負に強い血筋受けつぐ　英
マカオには裏口抜ける聖堂も　文
妖怪凍る丑三つの刻　わ
寒取の取的さんの乱れ髪　文
まっさかさまに彼の懐　壽
水底に帯を繋ぎて眠りをり　士
夢は夢ですされど夢追ふ　壽
月澄める心の中も映しだし　同
名残狂言熊谷の佇つ　文
ナウ 行き戻りZの軌跡鬼蜻蜓（やんま）　士
アプト式なる鉄道の坂　わ
木簡の土はらひつつ花の野辺　英
傘を斜めにうららかな午後　わ

連衆　橘　文子　杉山壽子　佐古英子
横山わこ

俳句そして連句

遠藤央子

寒けれど二人寝る夜ぞたのもしき　翁
　かたきふとんにふとさめし夢　あや子
山ふかく岬の空のひろがりて　央子
　姉の好みし名の草のあり　一郎
さしのべて手燭をしのぐ月の影　あ
　せいろ取り出し栗の飯炊く　央

一九九〇年十二月、伊良湖の宿でのはじめての連句の表六句である。

捌は平井照敏先生。文字通り膝を交えての贅沢な御指導であった。

「槙」には春秋二回の吟行があった。ひたすら句を作る文字通りの鍛錬会である。夕食が済むや句会場に直行、出句の全部を書き写し、選句する。皆必死の形相である。先生に特選でとっていただいたこと。

もうこんな句は作れない――「何を言っているんですか。ひとりで出来るところまで仕込んだ筈」――先生のソフトなお声がきこえてくる。やさしくてすごくこわい先生だった。

初日二回の句会が終るのは十一時頃、引き続き有志の句会と懇談が深夜の二時か三時まで。翌朝先生は平然としたお姿で三回目の句会にのぞまれる。

この時連句の御指導をお願いし、二ヶ月後同じ宿で実現したのが冒頭の歌仙だった。弟子が三人という勿体ない座。その後十数回もお教えいただいている。

先生は「連句大切の事」の中でこう述べておられる。

およそ表現とは、総合力と思っているから、連句をやれば俳句が下手になるといった類のことは無視することにしている。さいわいなことに、東明雅先生、草間時彦先生という、連句会の二名匠と御一緒に度々三吟をさせていただき、私には、連句は、自分の内面をゆたかにこそすれ、句作にマイナスになるものには、決して思われぬものであった。――以下部分抜粋――

私の参加したところで秀逸をふりかえれば

秋簾深くて素顔見せざるよ　照敏
　光源氏も老いにけらしな　時彦
ひもすがら籠の鸚鵡にひとりごと　明雅

とか、

関根恵子はよき女なり　時彦
　椰子の実を割れば零るる汗あまき　明雅
日抜き通りに巴里祭の月　照敏

とかということになろうか。連句の一巻は人生の消長のごとくで、山あり谷ありでよいのではないかと思う。――以下略――

私を猫蓑会に誘って下さったのは福井隆秀さんである。福井さんは一九九一年春、「槙」に入会、一九九四年十一月二十七日に逝去されるまでの句友だった。月例会の二次会ではよく連句が話題になり、熱意ある、言葉を選んでの話しぶりに耳を傾けたものである。死の前年の大病で、三月の句会から復帰されたものの、七月の句会が最後になってしまった。

死の翳の噴水はたと止みしかな　隆秀

すごい句である。何度読んでも胸を突かれる秀句だ。

ここでも、平井先生の文を引用させていただく。

生は死の稽古なるかや冬に入る　隆秀

人はなぜか死に臨むと、まことの一声をのこす。この句はまさしくその一声であろう。よい句になっていると思う。

連句にすぐれた手腕を持つ隆秀さんの句はとかく連句風に流れがちで、それでは浅い味。もっと深い味をうたわねば俳句にならない。それを学びに隆秀さんは「槙」に入られたのだと思うが、その深い味が、最後の投句で見事に出たことがかなしい。

福井さんが亡くなられてお悔みに伺い、わざわざA・C・Cまでご同行下さり、猫蓑会にも入れていただいたお礼を申しあげると、「おせっかいなのですよ」と奥様は静かに笑っておられた。思いやりのある、深切だった福井さん。

お蔭でA・C・Cに通えなくなっても宗匠の方々からご指導をいただき、特に緑華亭には幾度かお邪魔をし、宗匠のこまやかな文音指導もいただいている。

財産はいっぱいあった筈なのだ。

二〇〇三年九月十二日に平井先生が亡くなられ、私は創作の意欲を全く失っていた。

それが、二〇〇五年の藤まつりで連句を学びたいと真剣に思い立った。鈴木了斎さんが道を示して下さったのである。十年程の空白が悔やまれるが、それはもう言うまい。

詩の沈黙、特に平井先生は俳句の沈黙を重視されたのだが、それと連句の有辨の中の制御。

今、声をかけて下さる先達に恵まれ、まっさらな気持ちで学んで行きたいと、しきりに思う。

連句入門

松島アンズ

丸谷才一著『輝く日の宮』に

「連句というのは・・・・何人もの連衆が集まって、五七五の長句と七七の短句を交互につけて、三十六句とか百句とかつづける遊びで、宗匠というのはその遊びの師匠役です。これは今で言えば、ピアノコンチェルトのとき、ピアニストが指揮者を兼ねるようなもの、なんて説明したことがありますが、もっと砕けて、ビリアード店のマスターで全日本のチャンピオンだったことのある人がお客の相手をしてゲームをする、そんな感じに近いんじゃないでしょうか［聴衆、爆笑］。」と、主人公が「元禄文学学会」で研究発表する場面がある。

このビリアードのイメージは『芦丈翁俳諧聞書』にある。

「玉が転んでるだ。見事に。」の、一巻の展開が上手くいっている表現を即座に想起させた。

子供の頃、父がキューを持たせてくれて「あの玉の右端に、これが真っ直ぐぶつかるように突いてごらん」と言うとおりにして、上手くいくと、台にある色とりどりの玉が面白いようにあちこちへ走って、すかっとしたことを思い出す。

言葉の玉を転がすためのルールが式目である。

五十代に入って始めたことに、自動車の運転と連句がある。どちらも私の世界を飛躍的に広げてくれた。

道路交通法の丸暗記と教習所の先生方の叱咤激励の末、手に入れた免許証は、なんとなく過ごしていたこの世は標示と標識でいっぱいであることを教えてくれた。以来私は、ただ歩くときもたいへん注意深くなった。

勉強しても勉強しても奥の深い連句の式目と運転免許証を短絡的に結び付けることはできない。しかし、式目を知っているということは、実作にはもちろんなくてはならないことだが、古典作品の鑑賞のためにも必要だという点で、少し似ていないだろうか。

ＡＣＣ連句入門講座に入ったばかりの頃、月の定座を習ったその日、国立博物館に寄り道した。ガラスケースに連歌の一巻が表を読めるように展示されていた。美しい崩し字を素養の無い者が読むのは困難だが、五句目にはまぎれもなく月の文字。それだけでうれしくて、うっとりと眺めたのだった。

名古屋の蕉風俳諧発祥の碑は、母の実家に程遠からぬ場所にあり、馴染み深いものであるが、例えばその七部集の中までも、教えていただいた式目を携えて入っていくことができる。

学者ではないので、想像力を羽ばたかせ、ここは連衆にうけたろうなとか、蘊蓄を披露した人がいただろうなとか、しばらく笑いの渦に包まれたのではないだろうかと、当時の座敷の隅にいるがごとしである。並んでいる句には規則があり、また、例外のない規則もないのだ。

『死ぬまでになすべきこと』の著者にお目にかかりたくて、連句のことなど何も知らないで入門したＡＣＣの教室。

拙句「ピストルの弾のコルクを貯めている」を可愛いといって採ってくださった式田和子先生の魔法にかかり、おかげで、連句は私の死ぬまでになすことの一つになった。

現実には、絶対安全運転だが、式目に忠実に謙虚にありつつ、夢の中では、大胆にオフロードもカーチェイスも、また外国では右側通行もありうるかと思う。

「連句入門」と私

西田一枝

夫の東京勤務で、平成十三年から、四年間の千葉暮しとなった。取り寄せたＡＣＣの案内を見ていくと、明雅先生の連句のお教室があることが分り、早速、四月からのクラスに参加したいと電話を入れた。（明雅先生のことは、豊田市に住んでいた頃、矢崎藍さんから伺っていた）。その時は、今期の募集は無いとのことで、秋からの参加となった。

私が入った頃は、明雅先生は、教室の後の方で見守っておられた。何かの折に、先生がレクチャーして下さることがあり、そんな時は、連句への情熱がほとばしるようなお話振りで、感銘を受けた。先生が、直接御講義なさっていらした頃は、どんなだったろうと思わずにいられなかった。

ＡＣＣが縁で、土良の会など、猫蓑の色々な句会にも、参加できるようになって、連句を巻いている時とか、二次会の折などに、先輩方の「そのことは『ねこみの』にこんな風にお書きになっている。」とか、「先生、お若い頃はとても熱心で、恐いくらいだった。」といった話を聞くと、とても羨ましく思われたものだった。

先輩方の話には、「芭蕉七部集」や、明雅先生の「連句入門」も度々登場した。「七部集」は神田の古書店で見つけ、購入したが、「連句入門」は、大型書店、古書店、インターネットなどで捜してみたが、どうしても手に入らなかった。そんな時、「連句入門」が常義さんなどの御尽力で、再版されることが決ったとの話を耳にし、楽しみにしていた。土良スペシャルの時だったと思うが、暑い中暁巳さんが、何冊も持込んで下さって、早速二冊購入した。

借越なことを顧みずに言えば、実作に参加させていただいてきたこともあると思うが、式目なども、分り易く書かれてあると思う。勿論、私が、それを十分咀嚼し、身に着けたということとは、全く別のことだが。また、「冬の日・狂句こがらしの」の鑑賞の章は、句座の様子までが、生き生きと窺えて、楽しい読み物になっていると思う。

それにしても、東京にお住いで、先生のお若い頃の御講義や実作の席に参加してこられた先輩方は羨ましい。せめて、先生が「ねこみの」などにお書きになったものを、どこかで読ませていただくことはできないものだろうか。

今では、私の連句関連の物が入れてある篭には、「十七季」や歳時記などと共に「連句入門」と「芭蕉の恋句」が御常連で、連句の旅の折には、旅鞄に移されるのである。

「連句入門」の再版に、御尽力下さいました皆様方、ありがとうございました。

ＡＣＣ「連句入門」講座

佐々木有子

ＡＣＣ連句入門のクラスは、昨年四月より場所を七階に移し、現在十九名が受講しています。午前十時より三十分程の御講義の後、十二時まで実作。毎回二句ずつ進み、三月十日に二十韻が無事満尾致しました。

御講義担当は市野沢弘子先生。豊富な資料を基にしての御丁寧なお話は、高校以来久しぶりに古典の授業を受ける私には、殊に新鮮で有難いものです。まじめな御講義の中に時々入れて下さる御冗談もまた楽しいです。

実作担当は坂本孝子先生。御丁寧な御指導の中に、自由自在かつ軽妙洒脱な先生のお話が混じり、教室にはいつも笑いが絶えません。次の回には、互選で選ばれなかった句も含め全ての出句に先生の丁寧な批評を書いたプリントを下さるので、本当に勉強になります。

それにしてもクラスの受講生のレベルの高いこと。皆さん、佳句をどんどんだされ、圧倒されるばかりです。でも、新人の皆さん、恐れることはありません。クラスは和気藹々と楽しく進んで参りますので、是非いらして下さい。最後に今学期の二十韻「風神図」の巻を御紹介致します。

二十韻　風神図

風神図の神に臍ある野分かな
草に乱るる満月の影
機械工夜なべ仕事をやり終へて
泣きやまぬ児をあやす揺籃
ウ
読みさしの「海辺のカフカ」テーブルに
サルサを踊る腰のうねうね
帰してはならじと隠す赤い靴
昔の鍵はまだ捨てぬまま
山かげを映し植田の水静か
アイスキャンデー幟垂れをり
ナオ
再生紙揃へて切って午後は雨
座敷童子に裾を踏まれる
みちのくに嫁ぐわが娘と別れ旅
恋メールには猫が末尾に
寒の月かうかうとあり終電車
雪景色なき年の淋しさ
ナウ
安田講堂安保世代の夢の跡
耕の手に小さきペン胼胝
花守のよろこびの酒供へたり
笊いっぱいの栄螺常節

事務局便り

◇猫蓑同人会
日　平成十九年六月十七日（日曜日）
時　十一時より十七時（受付十時半より）
場所　新宿ワシントンホテル
新宿区西新宿三―二―九
電話０３―３３４３―３１１１
総会終了後　歌仙興行

◇猫蓑会総会
日　平成十九年七月十八日（水曜日）
時　十一時より十七時（受付十時半より）
場所　江東区芭蕉記念館
江東区常盤一―六―三
電話０３―３６３１―１４４８
総会終了後　歌仙興行

◇猫蓑基金にご協力有難うございました。
天の川連句会様　六千円
山寺たつみ様　五千円
篠原　達子様　一万円
基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通３３７６０４５

◇新人会員紹介
田中初子　名古屋市
小崎郁子　名古屋市
宮川尚子　名古屋市
古賀寛武　名古屋市

◇会費納入のお願い
猫蓑会の平成十九年度年会費納入をお願い致します。
四月と七月の例会時に受付で申し受けます例会に出席できない方は左記口座にお振り込み下さい。
猫蓑会　みずほ銀行新宿新都心支店
普通３３７６０８８

季刊　『猫蓑通信』第六十七号
発行人　猫蓑会　青木秀樹
〒１８２―０００３
東京都調布市若葉町
二―二十一―十六
編集人　猫蓑通信編集部